



20th CENTURY

20世紀の文学

世界文学全集

24

モンテルラン

独身者たち

カスティリアの姫君

クロード・モーリアック

あらゆる女は妖婦である

集英社

Auteur : Claude MAURIAC
Titre : TOUTES LES FEMMES
SONT FATALES
© Editions ALBIN MICHEL, Paris.

© 1965 Shueisha

世界文学全集

24

モンテルラン

クロード・モーリアック

昭和四十年十月二十八日 印刷

昭和四十年十一月二十八日 発行

訳者 安東次男・渡辺一民

発行者 陶山 巖

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 凸版印刷株式会社

本文用紙 日本パルプ工業株式会社

表紙 東洋クロス株式会社

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話(265)六一一(代表)

振替 東京一五六五三

定価 五二〇円(落丁・組丁本は本誌で
お取りかえいたします)



目次

モンテルラン

独身者たち

カステイリアの姫君

クロード・モーリアック

あらゆる女は妖婦である

モンテルランとクロード・モーリアック

渡辺一民訳
五

渡辺一民訳
一八

安東次男訳
三元

渡辺一民
四七

モン
テ
ル
ラ
ン

独身者たち

第一部

一

一九二四年二月のその寒い夜のこと、七時ごろだったろうか、夜目にはさだかでないごま塩の不精ひげをはやし、六十は越しているように見うけられるひとりの男が、アラゴ通りからほど遠からぬラ・グラシエール街の、とある店さきに根でもはえたように立ちつくし、店頭のあかりで、切手蒐集家用の四角い大きな拡大鏡をつかいながら新聞を読んでいた。かれは着古した黒い長外套を身につけていたが、それは脛のなかほどまで垂れさがり、かぶっている底つきのくすんだ色

の帽子は、一八八五年ごろに売りだされた型の、いまはそれぞれ上へあげた両側の耳かくしに、顎ひもが通っているというしろものだった。だれかがそばへ寄ってこの男をつぶさに観察したならば、その服装のひとつひとつが《だれにも真似のできぬ》ものであることを見てとったにちがいない。帽子は三十年は流行おくれのものだったし、長外套は鎖のようにつながった二つの安全ピンでカラーにとめてあったし、糊のきいた白いワイシャツのうえについてるカラーは、芯地がのぞき、ほぐれてレースのようなふさができていた。ネクタイはといえば、とどころ色あせた黒い布地でおおわれている、なにか縄のようなものといったほうがずっとわかりがよからう。だぶだぶのズボンは、仕立て屋が《股がみ》とよんでいるものより十五センチは下のほうまで垂れさがって、編上靴の片ほうの靴紐は（ばかでない編上靴である）麻ひもの切れはしで、黒インクを塗るつもりでいたものであった。

穿鑿好きがさらに自分のぶしつけさを気にさえないければ、おなじようなふとい麻ひもがわれらの主人公のバンドがわりに使われていて、しかもかれが猿股をはいていないことにまで気がついただろう。服の内側には、ちょうどアラビヤ人の衣服とおなじように安全ピンがいっぱいぶらさがっていた。両足には二足の毛の靴下をかさねてはいている（靴のふくらみはたぶんそのためだった）。ポケットをひっくりかえ

してみたまえ、そこに興味ぶかい品物が見つかるにちがいない。古いパンの皮、角砂糖二つ、黒いタバコの葉とかわいたパン粉のまじりあつたうす汚いごみ、メッキでない本物の金時計。その時計は人目をひかずにはおかぬものだった。すばらしい値打ちものの美しさをそのかたちであらわしている、古い平たい懐中時計で、時計の側はこつた装飾の紋章によって（獅子と焰を中心にさまじな模様があしらつてある）文字どおりおおいつくされ、男爵の冠が彫りつけてあつた。さういふに財布のなかをのぞいてこの穿鑿を終えることしよう（鉛筆さしに鉛筆もないようなぼろぼろの財布なのだが）。そこで出くわすものは、まず片側に百フランばかりのお金、反対側に「ジェンニー、舞台化粧用おしろい云々……」といるされた一枚のちらし、そして十年まえからそこにはいつていたにちがいない三枚の名刺、というのは、いずれも黄ばんで、その縁などほとんど茶色に変色していたからである。名刺には、「エリー・ド・コエトキダン、リスボン街十一番地」という文字がごく月なみなやり方で印刷されていた。ただ、それだけは田舎でしか、というよりたぶんもうブルターニュあたりでしか見られない、いまだき珍しいものだったが、名刺の文字のうえには男爵の冠が刻んであつた。

エリー・ド・コエトキダン氏は、足を釘づけにされたように、通行人にこづかれても泰然自若（じやうじやく）として、その床屋の店さきのほのあかりで、新聞をすみからすみまで読みふけてい

た。ほかにもつとあかるい店はいくらでもあつたが、かれは毎晩おなじ時刻に、この店さきで新聞を読むことにしていた。この習慣はもう九年間もつづいていたのだ。記事を読みながら、その口からはときどき「ルルル……」という、かれにしかできないいかにも独特なうめき声や、「ちくしょう！」——「くそ！」——「ルルル、そりゃあそうさ、若僧め……」といった間投詞さえとびだしてくるのだった。やつとひろげたままの新聞のはしをもつて、かれはアラゴ通りのほうへと歩きだした。ときどき歩みをおそくして、かれはステッキのさきで、歩道のうへの紙くずやごみを突つてみるのだったが、それはまさしく鉤棒（かぎぼう）を手にした屑屋のむかしながらのしぐさにはかならなかった。

アラゴ通りに出ると、とある鉄柵のまえで立ちどまった。そのうしろには闇をすかして小さな庭と、ありふれた構えの小さな家が認められたが、家の正面にはあかりがついていなくて、だれも住んでいないように見うけられた。ド・コエトキダン氏は鍵束をとりだし——それもまた、ズボンや編上靴とおなじようにすりきれて、見たところすっかり毛ばだった麻ひもでむすんであつた——かれは鉄柵の扉をあけた。なかにはいつて、植えこみから一枚の葉をむしりとり、そのつけ根を歯のあいだにおしこむと、家のまわりをぐるるとまわり、ただひとつそこだけあかりのともっている部屋にはいつていった。それが台所で、もう働きごかりをすぎた、牝鶏の

ような頭の、やせた大柄な女が、かまどのまえで働いていた。

「ああ、お帰るなさいませ！」と女がいった。その声のかんだかいびきからも、言葉づかいからも——メラニーはふう三人称でかれに話しかけていた——ド・コエトキダン氏には、一杯飲んでいるなどすぐにわかった。

田舎芝居の役者を連想させる一種貴族ふうの大げさな身ぶり、かれは腕をのびし、どういうわけだか、いつもべとべととしていつも汚いその指あとのついている、しわくちなな新聞をひらいたままメラニーにさしだした。

「さあ！ これをやろう！」

その身ぶりも、「これをやろう！」という言葉も、王冠をさずけるとしたところで、これ以上いかめしくするわけにはいかなかったらう。だがふいに、ド・コエトキダン氏は台所のなかを心配そうな、ほとんどうろたえたような眼ざしで見まわしながら、

「ミニーヌはいないのかい？ ミニーヌはどこへいった？」

「ミニーヌですって？ ああ、浮気していますよ！ でもグリーズならさつきそこにいましてけど。あいつはこのあたしを侮蔑したんですよ。ええ、ちょうどいまお立ちになっていらっしゃる場所ですね。まだ匂っていますとも」

「いいや、匂ってはおらん」と、ド・コエトキダン氏は口ごたえを許さぬといった口吻でいい放った。

「そうですか！ でもさつきそこいらしたらねえ！ ほんとうにあの猫たちときたら！ 四年まえからみんないるんですよ。だのにいまだに、どこもかしこも汚しまわるんですからねえ！」

「わい、家でそんなことはしないと」と、おなじ調子で年寄りはいった。しかし、きゆうにその顔がかがやき相好くずして、「はれみろ！ ミニーヌだ！」と叫ぶと、メラニーを押ししたおさんばかりにあらあらしく台所をよこぎり、扉をあけた。すると一匹の猫がすべるようにはいってきて、ひととびで椅子のうえに、さらにもうひととびでド・コエトキダン氏の肩のうへにのってじゃれはじめた。

ド・コエトキダン氏は、猫にたいして大きな権威をもっていた。両脚のあいだの尻尾のつけ根のところを撫でまわすことなど、ほとんど独身者にしか知られていない、猫を愛撫する方法をすっかり心得ていたのである。かれにかかると猫は氣ちがいのようになってしまふのだった。

「ところで今晚の食事はまだかね？」と、かれはふいにいった声でたずねた。

「ド・コアントレさまをお待ちしているんです。公証人のところへお出かけだったのです。ほんのいましがたおもどりになったところで、いま着がえていらっしゃるのですよ」

一言もいわずに老人は振り鈴をとると、家のなかに通じている扉を細目にあけ、老人特有の性急さで、しかも同時に武

器を手を攻撃命令をくだすときのような、「全員橋にかかれ！」と号令するときのような、決然たる面もちではげしく振り鈴を鳴らした。口には年おいた山羊のように、あいかわらず木の葉をくわえていた。叫んでいる声が聞こえてきた。「いまおりていきますよー おりていきますよー」

台所はひろびろとして、すみずみまできちんと片づいていた。それにそこは、家じゅうで整頓されている唯一の部屋だった。あかがねの二組の台所用品が太陽のようにぴかぴかと光っている。部屋のまんなかには、上等なテーブル・クロースのかかっている調理台がおかれ、そのうえに二組のフォークやナイフが、グラスや切り子ガラスの水さしといっしょにならんでいた。寒さのきびしいときには、家じゅうをあたためている大きな暖炉の熱がよくゆきわたらないので、わざわざ食堂で火をたいたりしないですむようにと、食事は台所ですることに決めてあった。銀器にも、テーブル・クロースにも、ナプキンにも、伯爵の冠がついている。椅子のひとつの背もたれに、麻ひもの切れはしのむすんであるのが見えた。あいかわらずド・コエトキダン氏の麻ひもだ！ どうして紋章のなかにもつけておかなかったのだろう！ まさしくその椅子は、かれの椅子だった。それに、食堂の十脚の椅子のうち脚のぜんぜん傷んでいないのはこれひとつしかなく、ド・コエトキダン氏がそれをわがものにしていたわけである。うっかりしてメラニーが他の椅子でも持ってこようものなら、そ

れこそ大騒ぎだった。その日もやはり、麻ひもを目にとめたにもかかわらず、椅子がはたしてしっかりしているかどうか、すわるまえにかねは確かめてみずにはいられなかった。そのとき、小さな紳士がはいってきて、せきこんでいった。

「お待たせしましたか、叔父さん？ 七時半をまわったとは思わなかったものですから。なん時です、メラニー夫人？」
 (ド・コエトキダン氏がみじかく「メラニー」とよんでいたのに、かれは「メラニー夫人」とよぶのである)

「そんなことありませんよ、七時半ちょうどです。ただド・コエトキダンさまがおいそぎだったもので！」

「公証人のところからもどってきたところなんです」と、小さな紳士はいうと、声をひそめてつけくわえた。「その件で食事がすんでからお話したいことがあるのですけど」かれがすわると、二人の紳士は牛飼いのように首にナプキンをむすび、晚餐をはじめた。

ド・コアントレ伯爵は、顔はまるまるとして、口ひげにも、みじかい山羊ひげにも、しらが一本なく、髪はみじかく刈りこみ、どう見ても四十八くらいだと思われなかったが、じっさいには五十三歳だった。スモーキングを着ていたものの、その前はすっかり切れ、そこどころだけ白っぽい大きな板でも張りついているようだった。洋服の織り糸が見えていたせいなのである。シャツは、油じみた襟の、あついカーキ色のフランネル地で、労働者の着るものだった。フェ

ルトの部屋履きは両方とも穴があき、ズボンはまさしくド・コエトキダン氏のおなじおかしな格好、つまり、股がみからきっかり十五センチばかり下にさがっていた。猫の爪あとで奇妙なふうに縞模様のできているエリー氏の手は、ほっそりとして女性の手のようであったが（かれにはこれが自慢だった。夏でも冬でも、二枚の毛の靴下をかきねてはかなければならない、感受性のするどいその足をも、おなじように自慢してはいたけれども）、ド・コアントレ氏の手はごつごつした、こでほとんどおおいつくされ、とりわけ指のさきはひびわれ、その小さな皺にはいりこんだ汚れのために、ねずみ色がかって見えた。まさしく労働者の手である。

食事のあいだ、二人の紳士は、常軌を逸したことがらの、考えられるかぎりもっとも見事なコレクションを、その言葉によって繰りひろげてみせた。ド・コエトキダン氏はかれの新聞をそらんじ、ド・コアントレ氏はその教養をひれきした。常軌を逸したというのは、二人のしゃべっているその内容に関してというより——そこにはすくなくとも真実が含まれていた——二人が知らないくせにしゃべりあっているというその事実のうちにあった。しかも二人とも情熱をかたむけあっていたのである。話のうちにブリアン（「アリス・ティード」ノた当時のフランスの政治家。国際連盟の指導者）の名が出てくると、二人の目からは火花が散った。モンリユック（「十六世紀のフランスの将軍。宗教戦争に際しをとどろ」を）によって串刺しにされた新教徒たちは、エリー氏に

よってもういちどおなじ目にあわされた。二人の言葉のうちに断定的でないものはなかった。人も事件も意見も、一言で裁かれ、断罪され、蒸しかえすことは認められない。といって、二度ほどみじかい皿があった。いちどは、ド・コエトキダン氏が王室親衛隊（大革命以前王室の守護にあつた親衛隊）の制服のボタンについて述べたときで、かれの語ったことはまったく正しかったのである。もういちどは、ド・コアントレ氏がみずからの發明にかかわるある装置について説明したときで、それは、庭のおくにある罠いのなかの、二羽の牝鶏の餌を食べにくる、ねずみを防止するためのものであった。この皿のあいだ、二人の紳士はそれぞれの専門の分野において、人の興味をそらずにはおかぬ人物となっていた。

紳士たちはやっとテーブルから立ちあがった。ド・コアントレ氏は石油ランプに火をつけて（たぶん、アラゴ通り全域にわたって、一九二四年に電気のきていなかったのはこの家だけであつたろう。それというのも、出費と新しいもののへの、二つながらの恐怖から出たことなのである）、「失礼しておきにまいりますよ、ランプがありますから」と叔父に声をかけ、台所を出ていった。家のなかは完全な闇にとざされ、ランプだけがよわよわしく、つかいふるした絨緞じゅうたんの敷いてある階段を照らした。大きな暖炉が階段の空間をつたって家じゅうをあたたためていた。ド・コアントレ氏はランプを持ってききにのぼっていった。途中までいって、ド・コエトキダ

ン氏がついてこないことに気づき、立ちどまった。

「あがつていらっしやらないんですか、叔父さん？」

「いいや、あたたまっているのさ」と、階下の暖炉のそばに立ったまま老人はこたえた。相手がなおためらっているので、保護者めいた口調でかれは言いたした。「わしの部屋にいていなさい。すぐあがつていくから」

ド・コアントレ氏は二階までのぼり、叔父の部屋にはいった。そこには強い體えたような匂いがみなぎり、世話のゆきとどかない赤ん坊でもいるようだったが、それというのも、いつも老人が頭につけている市場で買う一種の髪油が原因だった。テーブルのうえには、インクでよごれ黄色くなつた本や雑誌がつかさねられ、わずかばかりの空間がどうかあけられていた。といつても、その空間にも、角砂糖だとか、パンの耳だとか、タバコの葉だとか、それからわざわざいうまでもないことだけれど、麻ひもの切れはしだとか、そういつたわれわれにとつてはとくにお馴染みの、エリー氏のものである例の品々が散らばっていた。テーブルのうえに見られるもののほとんど、本にも、タバコの包みにも、売薬の箱にも、消印のおされた古切手が貼られている。というのは、ド・コエトキダン氏は手紙のうえに切手を見つけると（切手が一枚でも見つかりはしまいかと、かれは毎晩ごみ箱をステッキで突つきながら歩きまわっていたのだ）、秘術をつくしてそれをはがし、なんでも自分の部屋にあるもの

のうえに、それを貼りつけなければ気がすまなかつたからである。

影になっている壁のうえには、おびただしい額縁、模造ブロンズの彫像、サーベルと革の鎧よろいあてをつけた甲冑かちう一式がぼんやりと認められた。寝台のうえにはキリスト像。そして書庫。武具などを目にする、例の穿鑿好きはすぐこう言い出すであらう。「かれはアルジェリア歩兵の退役少佐だ。そういえば顎ひげがなよりの証拠だ」と。しかしド・コエトキダン氏は、かつてほんの一週間たりとも兵役についたことはなかつた。「そうはいつても、狩猟家であることは否定できない？」片すみにある銃と獲物袋、テーブルのうえの三冊の『フランス狩猟家年鑑』、もっともそれらはそれぞれ四年、七年、十一年とむかしのものだったが、ともかくそういつたものを見つけたすと、くだんの男はこういつてふりかえるかもしれない——しかし、ド・コエトキダン氏は、どうやって銃を装填そうてんするのかわからないばかりか、獲物袋も、かつて紺のタバコの包み以外のものをいれたことはなかつた。それでも穿鑿好きはこんどは書庫をあけ、下のほうの棚に（それは板張りになつてそこからは見えなかつた）、クロイ・デイ、ヌも（『女流作家コレットが一九〇〇年から』）やヴィレット（アドルフ・リョの三年にかけて発表した一連の自伝小説）、（『シャルル・リリッシュの当世』）の当代一流の挿絵画家とレオナルド（つとも人気のあつた諷刺画家）のアルバム、《芸術ヌード》の絵はがき、メーゾロワ（大衆小説家）とシャンソール（フエリッシュ。当）の本があるのに気がついて、

勝ちほこったようにこう叫ぶだろう。「わかった、わかった！
巷のわずらわしさをのがれた老人なのだ」——ただし、六十
四歳のド・コエトキダン氏は童貞だった。

ド・コアントレ氏はテーブルのうえにランプをおき、ふた
たびためらいの色をみせた。《叔父さん》がしずかに階下に
居残って、あたたまりながら自分を待たせているということ
は、あらかじめ話さなければならぬ重大な用件があるといっ
ておいただけに、たしかに失敬なことと思えた。しかし、尊
敬することがすっかり習性となっていたかれは、そうかとい
ってべつに気を悪くもしなかった。待っているあいだ、テー
ブルのまえにおかれたこの部屋唯一のひじ掛け椅子にすわる
こともできたろう。が、そうした考えも浮かんではこなかっ
た。それは叔父さんの椅子なのだ！ この部屋にある腰かけ
るものといえば、そのほかひとつだけ椅子があるにはあつた
が、それはなんキロもあろうというラ・サールタッシュ
〔昔軍人がサーベルの脇についたカバンのこと。ここでは「陸
軍月報」といったような雑誌のことであろうが、詳細不明〕のバックナ
ンバーで埋まっていた。それはあたかも、この椅子はすわる
ためのものではない、ド・コエトキダン氏を訪問する客のま
るべきエチケットは、ド・コエトキダン氏が自分のひじ掛
け椅子にすわっているまゝに、立ったままであることである
とでも教えているようだった。さらに待たされそうな気配な
ので、ド・コアントレ氏は、表情にも読みとれるような、ひ
とかならぬ内心の煩悶を経たのちに、ついにラ・サール

タッシュをどかす決意をかため、やつのことでそれをテー
ブルのうえにのみあげた。そうして、ポケットから一枚の紙
をとりだすと、それをテーブルのうえにおき、自分は椅子に
すわって待つのだった。

階下からは、ド・コエトキダン氏がパイプに唾をたらしこ
む、プシュ……プシュ……という音が聞こえてきた。という
のは、この老人はパイプのなかに唾をいれる癖があつて、最
後にはパイプにおびただしい唾液がたまつてしまい、かれが
パイプの頭をさかさまにして、庭の砂利石のうえに、ひとつ
づきの黒っぽい液をいつまでもふり落としているすがたは、
よく見かけられたものである。つづいて、ド・コアントレ氏
はべつの特徴ある物音を耳にした。すると、見るまにその顔
は怒りで醜くゆがんでしまった。

その物音は、火をもっとよくして十分あたたまつてやろ
うと、ド・コエトキダン氏が暖炉のとめ金をまわして立てた
音だった。ところで、こうしたド・コエトキダン氏のなんでも
ないような動作も、この家で見られるおおくの動作や言葉
同様、慣例となつているものだったが、それがまたずっと以前
から、これもまたごたぶんに洩れず慣例となつている、ある
悶着の原因となつていた。この家が、ド・コアントレ氏の母親
であり、ド・コエトキダン氏の姉であるド・コアントレ伯爵
夫人の手で切りもりされていた時代から（それはそう古いこ
とではない。かの女の死んだのは六ヵ月まえのことである）、

ド・コエトキダン氏は部屋代と食費として月つき五百フランを姉に支払い、いまはそれを息子に支払っていた。ところで、老人が指で暖炉のとめ金をそつとはずすと、石炭の消費量が増加するというわけだった。かくて怒りが、ド・コアントレ夫人が階段のうえから、いたずらっ子を叱るように弟を叱りつけるのは、めずらしいことではなかった。

「エリー、また暖炉にさわりましたね！」

「いいや！」

「嘘をおつきなさい！ 聞こえましたとも！」

「ちがうといつてますよ！ ええ！」

(ついでに、われわれの頭にえがいている十七世紀をみごとに表現してくれる、このええという言葉に敬意を表しておこう。もっともこれははつきりいつて、かれが老いばれた退役少佐ではないと仮定したうえでのことであるけれども)

いまでは暖炉のとめ金は、あわれな伯爵の弱い頭脳のなかで、たえず不安をはぐくんでいるもののひとつだった。不吉な物音を聞きつけ、その場で、石炭のむだづかいを認めるか、叔父に注意するか、そのいずれかを選ばなければならないことに煩悶しながら、かれは暮らしていたのである。起こるかもしれないことが、かれの心のなかで悲劇的ともいえるような大きな場所をしめていたのだ。昼食のあと、老人が外出するのをうかがって、家の扉のしまる音を耳にするや、かれは三階からかけおりて、暖炉のとめ金をかけるのだった。夜に

なって、まさに寝つこうとしているとき、はっとして目覚めることもあった。暖炉のとめ金をはずす音が聞こえたような気がしたからだ。

やつとド・コエトキダン氏が階段をのぼってきた。足があまり速者ではなかったので、しっかりと手すりにつかまっていた。その格好は、まるで手すりを抜きとろうとでもしているようだった。手すりはそのために家の下から上まで震動していた。ド・コアントレ氏は、足もとをあかるくしてやるために迎えに立った。ド・コエトキダン氏が部屋にはいつてきた。

「叔父さん、こんなことははじめてなのですけど、どうしてもあなたに実情をお話ししなければならなく……」

ド・コアントレ氏はきゅうに口をとぎした。叔父の眼が椅子のうえに落ちた。ラ・サールタッシュがそこにはない！ はやくも年寄りの眼は方向をかえ、ついさきほど、「ミニヌはどこへいった？」とたずねながら台所のなかを眺めまわしたときのように、うろたえた光をうかべて部屋じゅうをさがしはじめた。

「そこにありますよ」と、ド・コアントレ氏はテーブルのうえを指さしていった。

エリー氏は神経質そうに指で雑誌を撫でた。ド・コアントレ氏はといえば、こんな叔父にはすっかり慣れていたにもかかわらず、すっかり驚いてかれの動作を見まもっていた。

老人は甥が一冊でも盗みやしなかったかと、疑ってでもいるように雑誌をかぞえた。それからすわって「ルルル……」とうめいた。この「ルルル……」という声は、ある種の猿が、自分のしていることに注意を惹きつけようとして立てるうなり声とおなじもので、いつも重大な意味を含んでいたし、だいたい人を脅かすような性質のものだった。

「叔父さん、母さまが亡くなられてから、あなたに家のことはお話しすまいと思っておりました。いつでも、母さまならこうなさるだろうということを念頭において、なによりも、叔父さんの平和をすこしでも乱さないようにと、つとめてきたのです」

「よくやっているよ、おまえは」と、ド・コエトキダン氏は相手を馬鹿にしたような口調でいったが、かれ自身も甥もべつにそれを意識しているわけではなかった。

「でも、ともかくあるときには、現実と対決することも必要です。生活していくには、現実的でなければいけませんからね」と、伯爵は断乎たる調子でつづけた（この現実的という言葉は、当時の新聞に見られた流行語のひとつで、ド・コアントレ氏をよりよく知るようになれば、かれのしゃべり方に一風かわった味わいがあることがわかってくるだろう）。「わたしはきょう、またブルディヨンに逢ってきました（ルボー公証人事務所の筆頭書記のことである）。あなたに実情を知っていたかなければならないときがきたのです」。

母さまがお亡くなりになったとき、資産はルボーの査定によると、動産をべつにして、七万フランほどありました（これはテーブルのうえにひろげた紙を一瞥した）。それに、母さまの部屋の書きものの机から見つかった二千フランをくわえてください。つまり七万二千フランです。ちびも（かれの姪シモーヌ・ド・ボーレのことである）、わたしも、留保条件をつけたうえで相続することに同意しました。ところが相続がおこなわれるとすぐ、アントニーが、元金三万、利息四万の債権をルボーのところに持ちこんできたのです」

「おまえの母さんは三万フランも、アントニーから借りていたのかい？」と、ド・コエトキダン氏は大きく眼をひらき、血の気のまったくうせた眼珠をむきだしにしてたずねた。

「そうなんです。一九〇九年から一九一四年のあいだに、まず三千フラン、つぎに五千フランというぐあいに……」

「で、その金をどうしたんだい？」と、エリー氏はめずらしく甥を見つめたままたずねた。

「なんですって、エリー叔父さん！ よくご存じのくせに。過去を整理するためだったんですよ」

じじつ、ド・コエトキダン氏はそのことをよく知っていた。というより、そうではないかとかねがね考えていた。その借財は、亡き夫の負債の延滞金を支払うためにできたものである。ただ、ド・コアントレ氏に父親のあやまちを思いださせるのに、それは見逃すにはあまりにも絶好の機会だと思

われたからだった。

「いまになって、新しい負債があらわれたのです」と、ド・コアントレ氏はつづけた。「ド・サンテュベルティ夫人から、父君のドーマーニュ氏が一九一二年に母さまに貸した千六百フラン、それに利息四千フランを要求してきたのです。わたしは母さまの書類のなかから、一九一六年にドーマーニュ氏の書いた手紙を見つけたのですが、そこでかれははつきり『あのことをお話しするのはもうやめましょう』といっております。でも、それはなんの法的価値も持たないようです。アントニーにたいしては、有価証券を売って完全に弁済しました。ド・サンテュベルティ夫人とは示談になり、利息のほうだけは勘弁してもらい、また売って支払ったわけです。つまり、七万二千のうち五万六千の支出で、残りは一万六千フランです。おわかりですか？」

「ルル……」と、細かいことはすべて曖昧だと思いこんでいるド・コエトキダン氏はこたえた。

「その一万六千のうち、母さまがお亡くなりになってから、家のためや埋葬のためなどにぎっと八千フラン使いました。それに、ルボーのかかりや謝礼金もあります。わたしはそれを二千フランと見積もっておりますけれど。とすれば、残りは六千、それも新しい債権者があらわれないとしての話です。ですから、あなたの甥の全財産は、毎月賄い料としていられてくださっている五百フランを考えないことにして、うま

くいつて六千フラン、ということになるのです。それにわたしの部屋にある四組の家具、母さまの動産のわたしのとり分は、ちびに譲ってやります。だいぶ場所をとりますしね。それに、あなたもどんなものかよくご存じでしょう、半分こわれなかった時代おくれのがらくたばかりです。まあ、ちびが自分で好きなようにするでしょう。結婚のとき役にたつと思うものはとっておき、残りは売るでしょうからね」

ド・コアントレ氏は話しやめた。沈黙があたりをしめた。ド・コエトキダン氏はただうなるばかりだった。

「ルル……」

愚かものならば、伯爵が小さな紙きれをのぞきこんだまました、この要点のぼやけた報告を聞いて、そこにちりばめられている専門用語に眩惑されたかもしれない。つまり、「……債権を持ちこむ……元金……支出……」といった言葉、それからあの「見積もる……」という言葉も忘れてはなるまい。これなど、事業に確信をもっている人を思わせるものがある。もっとも、鋭敏な人だったら、ド・コアントレ氏が、数字や事実全般についての、自分のぬきさしならぬ無知と無理解を隠そうとしてもちいている、その仮面をたちまち見破ったにちがいない。

かれはつづけた。

「よくおわかりになったでしょう、叔父さん。一方にいったいがつさいで六千フラン、もう一方にあなたが賄い料として